

キノボのゆうき

奄美市立屋仁小学校二年 上崎 ゆうき

ぼくは、キノボリトカゲのキノボ。七さい。かくれんぼが大すきで少しなき虫。あまみ大しまのやにあるみや寺山にすんでいる。ふかみどり色のきれいな山だ。

ぼくには、なかよしの友だちがいる。アマミノクロウサギのクロちゃんだ。クロちゃんは、あかるい間は、すの中にいて、くらくなると外に出てくる。だから、ぼくは、夕方あそびに出かける。すの前で、

「クロちゃん、あそぼうよお。」

とよぶと、十五センチくらいのあなからクロちゃんが、ひょこつとかおを出した。

「あら、キノボ。ちようどよかったわ。いっしょにえさをさがしに行きましょうよ。」

と言った。ぼくたちは、森のおくまでえさをとりにいくことにした。その日は、いつもよりたくさんのお虫やしいのを見つけた。ぼくたちは、いい気分でした歌を歌いながら森をあるいた。

ガサガサ。とつぜんモダマの木の上からマングースのマンダーとノネコのノネーコが、とび下りてきた。二ひきは、森のきらわれものだ。ぼくたちは、いそいでにげ

ようとしたけれど、すぐにおいつかれてしまった。

「おい、えさをよこせ。」

マンダーが、きばを出しながら言った。ぼくは、いやだつたけれどしかたなくえさをわたした。せつかくクロちゃんとおつめたえさだったのに……。くやしくてなみだが出てきた。そのとき、

「わたしたちとしようぶしよう。もし、わたしたちがかつたら森のみんなにいじわるしないで。」

とクロちゃんが、さけんだ。よく見るとクロちゃんは、ふるえていた。クロちゃんは、すぐくゆう気をもっているんだ。ノネーコは、

「にやはは。かてると思っているのか。いいだろう、おもしろい。」

といじわるそうにわらった。マンダーも、

「おいらの力を見せてやるぜ。」

と言つてぎよろりとにらんできた。

さいしよに、クロちゃんとマンダーが、あなほりたいけつをすることになった。

「おいらには、するどいはある。まけるわけがない。」マンダーは、じしんまんまんだ。

「よいい、スタート。」

たいけつがはじまった。

「クロちゃん、がんばれ。まけるな。」

ぼくは、口を大きくあけていっしょうけんめいおうえんした。クロちゃんは、あなほり名人だ。ふといつめで、あつという間にマングーの十ばいのあなをほった。

「ちくしょう、なんてこった。」

モダマの木のねっこをけりながらマングーが、くやしがつた。

「やったよ、キノボ。つぎは、あなたのぼん。」

「うん、ぼくもぜったいかつよ。」

クロちゃんとあく手をしてぼくは、ノネーコをぎつとにらみつけた。クロちゃんは、ぼくや森のみんなのためにゆう気をだしたんだ。そう思うと、何だか力がわいてきた。

ついに、ぼくとノネーコのかくれんぼたいけつがはじまった。マングーがぼくを、クロちゃんがノネーコをさがして先に見つけた方がまけた。ぼくは、大きなガジュマルにかくれることにした。ぼくのときぎは、まわりの色にあわせて体の色をかえることだ。しずかにガジュマルのえだとおなじ色にかえてうごきをとめた。ながい時間がたつてよるになった。すると、ぎらつ。くらやみの中でノネーコの目が、ぎん色に光った。

「あつ、見つけたわ。ノネーコ。」

クロちゃんがさげんだ。

「やったあ、ぼくたちのかちだ。」

ぼくはクロちゃんとだきあつてよろこんだ。

「まいった。もう、いじわるはしないよ。おれたち、本とうは、みんなとなかよくなりたかったんだ。」

ノネーコが言った。マングーもぼろりぼろりとなみだをながしている。マングーは、とおい国からつれてこられてさいきんでは、なか間が少なくなつてしまっている。ノネーコは、人間とくらしていたのにある日とつぜん山にすてられて一人ぼっちになった。マングーとノネーコは、さびしかったんだ。きゆうに、ぼくは、二ひきがかわいそうになった。

「ぼくたちが、とつたよう虫やしいのみをいっしょにたべよう。」

「いままで、ごめんね。これからは、なかよくしよう。」
ぼくたちは、そう言つておたがいあく手をした。それから、みんなでみや寺山のとっぺんで、いっしょにえさをたべた。

「おれ、こんな楽しい気もちでたべるえさは、ひさしぶりだ。」

ノネーコがしあわせそうに言った。

大きな月が、やがて、ゆつくりみや寺山にのぼつてきた。

「わあ、まん月だ。あかるいなあ。」

四ひきは、ならんで月を見上げた。月は、楽しそうにう

ごく四つのかげを、やさしく見つめ、いつまでも青くて
らしていた。